令和八年十月吉日初版作成

み教えがどのようにして生れたか

高嶋善三郎

目　　次

●み教えがどのようにして生れたか・・・・・・・・・・・・３
●救世主の降した教え・・・・・・・・・・・・・・・・・４
●み教えの特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
●祈りによる世界平和運動のあり方・・・・・・・・・・・７
●救世の大光明の神々という存在・・・・・・・・・・・・９

み教えがどのようにして生れたか

五井先生のみ教えは、新しく生まれたのでなく、世界平和、大調和という昔の昔（無限億万年前）からある、宗教の根本理念が、五井先生の神との一体化によって、神と五井先生との約束事として姿を変えて生まれたものであり、それが消えてゆく姿で世界平和の祈りという教えである。それ故に世界平和の祈りを祈る所に、大光明波動がひびき渡るということになったと説明されています。

「天の理想を地の現実に現わすために、今日まで幾多の聖者賢者が、種々と教えを説いていたのであるが、その教えは天の方を主にして説いていたり、地の方の、いわゆる修養して天に昇ってゆく方法を説いたり、無為とか空とかという教えで、説いたりしていたのである。そして今日では、天と地が十字交叉する、ちょうど中心に位する教えが現われなければならなくなっているのである。そこで私は、世界平和の祈りを神様から広めさせられているわけなのである。」（１９５８年９月２５ページ）

「私は私の全託の体験から、神一元の世界、一本筋で私の教えを通すことに定めた。定めたというより、神のみ心が、私に白光の教えを説かしめたのである。全人類の心が神一元の世界観にならなければ、世界平和が出来上るはずがないのである。」（１９５９年５月１０ページ）

「面白いことに、私の教えというのはいつ始まったのか、いつ世界平和の祈りが始まったのか、皆目（かいもく）覚えていないのである。知らないうちに消えてゆく姿を教え、知らないうちに世界平和の祈りを唱えている。普通は立教何年とか、お祝いをやるのだけれど、教えを立てたのがいつだかわからない。無限億万年前に教えが立っているのである。それが今現われて来ただけ。ただその取り次ぎを、この肉体がしているだけである。」（１９６２年１０月１９ページ）

「うちの教えは、新しく生まれたのではないのである。世界平和、大調和というのは昔の昔からある、宗教の根本理念なのですから、今更生まれたのではなくて、姿を変えて生まれただけなのである。」（１９６２年１２月２０ページ）

「私が新しい宗教教団を開いた時、その根本はどこの宗教団体よりも入りやすく行ないやすい、日常生活そのままで何の戒律も、その人の自由を縛る何もの何ごともない、易行の道であったのである。それが守護の神霊への感謝行と、消えてゆく姿の教えだったのである。そして後に、消えてゆく姿で世界平和の祈りという、個人人類同時成道の祈りに発展

して来たわけである。」（１９６３年１１月５ページ）

「我々の宗教というのは、私がまず体験してよくわかった。そういう点から出発しているわけである。わかったというのはどういう事かというと、自分と神様とが一つだった、ということなのである。」（１９６６年８月１６ページ）

「科学の道は時代と共に急速に進んでゆくが、宗教の道はいつまでも昔の宗祖を最大なものとして、現代の宗教者はその末輩の者として思うような習慣がついておる。もしそうであるならば、この世は宗教によっては絶対に救えないことになって来る。昔の宗祖に対するあこがれが、宗教者自身にも強くあり、常に自らを昔の宗祖の下に置こうとするのである。しかし、それは果して神仏の喜び給うところであろうか。

昔の宗祖では、未発達の時代で言い現わす言葉の無かったような新しい道を、新しい言葉で宗祖の建てた塔の上に、つなぎ合わせていってもよいと思うのである。

釈尊の教えがインドの地で説かれたからといって、その原語でわからなければいけない、という馬鹿な話は無いと同じように、現代には現代の行き方があり、祈り言葉があるのである。

様々な過去から伝わっている呪文にしても、祈り言葉にしても、すべてその宗祖が神仏との交流で定めたことなのであって、その内に含まれている意味や、神のみ心のひびきが伝わって来れば、新しく神との交流によって、現代に適する祈り言葉をつくり出しても、一向に差し支えないのである。

私は神との一体化によって、消えてゆく姿で世界平和の祈りという教えを伝達された。世界平和の祈りは、神と私との約束事で生まれたのである。世界平和の祈りを祈る所に、大光明波動がひびき渡るということである。」（１９６７年１１月１７ページ）

「結婚前の妻との会話の中で、私は生長の家の教え方の不備なところに気がついたのである。それは人間を完全円満な神の子にしておいて、人間の悪や欠点が見えると、心の法則で責め裁いてゆくという、実相と現象の二本立ての教えの不調和だったのである。妻の日々の何気ない生長の家批判で、私の心が消えてゆく姿で世界平和の祈りという、教えを生み出していったのである。

であるから、白光の教えには妻の力が大いに働いていたという事になる」。（１９７９年１０月８ページ）

救世主の降した教え

み教えは、五井先生の肉体を通してこの世に知らせて下さったのは、救世主みずからであると言われています。

「この世界平和の祈りを、私の肉体を通してこの世に知らせて下さったのは、救世主みずからであるのであるから、この祈りに力の無い道理がないのである。」（１９５８年６月１０ページ）

「消えてゆく姿の教えも、世界平和の祈りも、肉体の私が考え出したものでも、言い出した教えでもなく、私に働いておられる救世の大光明、つまり守護神霊団の愛のみ心が、すべての人間の心を痛めず、日常生活そのままで、何らの無理も難行もせずに、やすやすと業想念を乗り越えて、しかも人類世界の平和達成の一つの光となれるような愛の方法を、私の肉体を通して、地球人類の為に宣布せられているわけなのである。」（１９５９年７月９ページ）

み教えの特徴

五井先生のみ教えは、五井先生の体験を通して生まれ出たもので、観念的な神の子観とはちがい、今日にふさわしい教えとして今回初めて現われたのである。そして神道も仏教もキリスト教も、全てを包含した総合宗教であり、個人と人類とが、同時に救われる道という点と、神様を、法則の神と愛なる神、即ち守護神との二つに分けた事と、本心と業をはっきり区別した事が、五井先生のみ教えの特徴である。また高い深い神の理念をその底に持ちながら、表面の姿としては最も安易に現世利益に妥協し、すべての想念行為、業想念行為をも消えてゆく姿という教えの中で、赦しきっていることも、他のみ教えとちがうところである、さらに神仏という言葉さえ取れば、唯物論者でも無闇に反対できないような宗教の在り方を唱導しているのだといわれています。

「神様を、法則の神と愛なる神、即ち守護神との二つに分けた事と、本心と業をはっきり区別した事が、私の教えの特徴である。」（１９５８年４月33ページ）

「世界平和の祈りは、最初で最後の真の祈りであることを、私は確信しているのである。」（１９５８年６月31ページ）

「私たちの祈りは、大乗と小乗を同時に行じている祈りなのである。」（１９５９年８月20ページ）

「私の宗教は、根底を本心開発、霊性開発においているのであり、その開発に従ってその人の生活の向上や、真の幸福生活が現われて来るといわれたのである。そして神道も仏教もキリスト教も、全てを包含した総

う教えなのである。」（１９５８年１０月２３ページ）

「私の教えは、真実のキリスト教であり、真実の仏教であり、神道そのものでもあるが、主に仏教の形をかりて説いている事が多いと思われる。」（１９５９年１０月２２ページ）

「神仏という言葉さえ取れば、唯物論者でも無闇に反対できないような宗教の在り方を私は唱導しているのである。」（１９６０年４月９ページ）

「私の教えは、高い深い神の理念をその底に持ちながら、表面の姿としては最も安易に現世利益に妥協し、すべての想念行為、業想念行為をも消えてゆく姿という教えの中で、赦しきっているのである。」（１９６０年４月１０ページ）

「私の消えてゆく姿で世界平和の祈りという教えは、私の体験を通して生まれ出たもので、観念的な神の子観とはちがうのである。」（１９６０年７月９ページ）

「私の宗教はどのような系列に入るかというと、神道的でもあり、仏教的でもあり、またキリスト教的でもあり、道教的でもあるという、何教的にも片寄らない、万教融合的という宗教の道なのである。

この世的な言葉でいうと、世界平和を唯一の目的としている、という宗教なのである。

世界平和というものを唯一の目的としながら、個人の本心の開発も出来、日常生活も平安になってくる、という教えを説き実行している宗教なのである。」（１９６２年２月６ページ）

「この世界にはあらゆる宗教があって、自分の教えを宣伝している。ところがあらゆる宗教というのは、宗派なのである。みな自分の祈り方があって、その方法をやっているわけである。すると一宗一派になってしまう。自分たちしかわからないのは、一宗一派なのである。

世界人類が平和でありますように、という祈りは誰にでもわかる。世界中がわかるであろう。言葉だって各国の言葉に翻訳すればいい。これは一宗一派ではない。こんなにやさしく誰にでも出来て、しかも人類的で、一宗一派でない教えというのはどこにもないのである。」（１９６２年１０月１９ページ）

「消えてゆく姿を世の中に出したこと、守護霊守護神をはっきり世の中に出したこと、それは私を使っている神様の大きな働きである。」（１９６７年１２月３３ページ）

「私の宗教は、神道も仏教もキリスト教も、全てを包含した総合宗教である。そして個人と人類とが、同時に救われる道というところに特長がある。そして他の宗教によくあるような、カんだ祈り方はないのであ

る。」（１９６８年１０月１４ページ）

「この地上界に宗教がたくさんあるけれども、みんな各宗派に分れて争い合っている。私の守護神団は、そういうことをしていてはだめだ、宗教は一つにならなければいけないと思った。

一つにするには、今まで無かったことで、しかも誰もが思うこと、思わずにいられないこと、そして祈りまで高まっていないものがあるだろうというので「世界人類が平和でありますように」という言葉がパッとひらめいて生まれたのである。」（１９６８年８月３０ページ）

「昔お釈迦様やキリストや、いろいろな聖者賢者がいた。みなそれぞれの教えをしている。しかし世界平和の祈りのような、今日にふさわしい教えというのは、今回初めて現われたのである。

新しい宗教もいろいろあるけれど、みな昔の教えの祈り言をやっているわけである。」（１９７７年８月１８ページ）

祈りによる世界平和運動のあり方

祈りによる世界平和運動の目的は、神の大調和なみ心と、人類の心とが全く一つになるように、私たちが人の心の波動を、神の調和した微妙な波動に、波長を合わせることであり、即ち私たち肉体を持った人間と、神霊の協力による運動であって、それが一つになって救世の大光明波動を、この地球に放射しつづけることであり、まず日本を世界の平和の中心国にし、そしてその平和のひびきで世界を引っぱってゆく、さきがけの役割を私たちが果たしていく道筋を示されています。

「世界中に充ちている業想念の波動を、少しずつでもよいから、救世の大光明の中に送りこんでゆくのが、私たちの役目なのである。」（１９６０年８月９ページ）

「世界平和の祈りの運動は、想念波動の浄化ということが主であるわけで、世界人類の想念波動が浄まらなければ、世界平和は決して出来るものではないと思っているわけである。」（１９６４年７月９ページ）

「私の運動はどういうことかというと、幽界つまり業想念の波のある所であるが、その業想念を光の波動で全部浄めてしまおうということなのである。」（１９６２年１２月１８ページ）

「神の大調和なみ心と、人類の心とが全く一つになるように、私たちは人の心の波動を、神の調和した微妙な波動に、波長を合わせる運動をしているわけである。

それが世界平和の祈りなのである。この運動は私たち肉体を持った人

間と、神霊の協力による運動であって、それが一つになって救世の大光明波動を、この地球に放射しつづけているのである。」（１９６３年５月８ページ）

「私共の会の運動というのは、世界平和の祈りを中心にして、日本を平和の中心国にする。そして平和のひびきで世界を引っぱってゆくのである。日本国民が総結集して、平和運動を推進しているのだというところへ、もってゆくための先がけとして、皆さんが平和の祈りをしているわけなのである。」（１９６４年１２月１７ページ）

「あらゆる病気や苦悩、闘争などをすっかり根絶するためには、自分の心をまず平和にし、人々の心に平和の光を与えるという運動がなされなければいけないし、現在私たちはそれをやっているのである。」（１９６５年４月１７ページ）

「世界平和運動には、一人たりとも敵があってはならぬと、私は思っている」（１９６７年６月１３ページ）

「自分で気づこうと気づくまいと、世界平和の祈りは世界の浄化運動である。世界の汚れた波動、闘争の波を、常に光によって浄めている大運動なのである。」（１９６９年１２月２４ページ）

「この祈りによる世界平和運動は、新しい未来をつくる根源の波動調整ということになるのである。」（１９６７年８月１５ページ）

「真の世界平和運動は、いざという時には生死をかけていささかも悔いない不惜身命の心と、いかなる挑発にも乗ってゆかぬ深い忍耐力、そして絶大なる勇気をもって、着々と歩を進めてゆく運動なのである。」（１９７０年８月１３ページ）

「私どもの運動は、ただ肉体人間としてやっているのではなく、神々や宇宙天使との協力によって、この地球界をおおっている業以上の力をもって活動しているもので、肉体人間の精神内部から、真の平和な心を湧き上がらせると共に、調和の科学を生み出して、根本から地球界を浄めてゆこうとしているのである。」（１９７２年１１月８ページ）

「世界人類が平和でありますように、というのが中にあって日々の生活をすることが、世界平和の祈りの運動なのである。それでなかったら忙しい人は出来ない。」（１９７７年９月２０ページ）

「我々の運動というのは、世界人類が平和でありますようにという祈り言と、教義『人間と真実の生き方』を中心にして、精神的なものを高めながら、その精神的に深まったもの、高まったものが、自ずから日本を浄め世界を浄めてゆくという、そういう運動になっているわけである。」（１９８０年１月１４ページ）

救世の大光明の神々という存在

世界平和の祈りをするところに必ず救世の大光明が輝き、自分が救われるとともに世界人類の光明化、大調和に絶大なる力を発揮すると言われています。また救世の大光明は、私たちの守護の神霊の結集された大霊団ともいわれています。

救世の大光明について端的に要約しますと、次の通りになります。

当初世界人類を救済しようと働いておられるマイトレーヤ仏（これは釈尊が予言された最後の救世主、弥勒仏）を中心とした守護神たちと、私共の祖先の悟った霊魂たちとの協力団体、即ち人類救済の大光明という大霊団であるといわれていますが、さらによくよく考えてみると、直霊と合体された五井先生のもとに、結集された神々の霊団ということに気づきます。代表的な事例として、１９６２年にイエス・キリスト、金星の長老、弥勒菩薩、釈迦牟尼仏、老子という五聖者との合体や、ヨガの七大聖といわれている、モリヤ太師やクートフミー太師が、肉体を持った使徒を通し、交流してこられたことをみれば、理解できます。

「世界人類を救済しようと働いておられるマイトレーヤ仏（これは釈尊が予言された最後の救世主、弥勒仏なのである）を中心とした守護神たちと、私共の祖先の悟った霊魂たちとの協力団体、即ち人類救済の大光明という大霊団である。（１９５６年７月号25ページ）

「統一に入ると、五井先生の霊団を見るがよい、というひびきがあった。すると大きな如来様が現われ、その後光の後ろにたくさんの神々がお出になり、前の方に金星の長老がにこやかに立っておられた。長老と重なり合って、五井先生がお出ましになった。右にキリスト、左に仏陀がいらっしゃり、先生のまわりには菩薩様がいっぱいおられた。その上に円になって、きれいに先生の神霊団が現われた。何百何千の菩薩が、皆さんの姿で霊団に参加しているのだ、という感じであった。〔斉藤長老〕」（１９５９年3月号４３ページ）

「大神様の大愛は、人類の運命の行きづまったように見えた時の救い手として、守護の神霊の大集団結による、大光明を用意しておられたのである。これがキリストの再臨であり、弥勒の下生であり、二度の岩戸開きであるのである。」（１９６１年3月号１１ページ）

「その大きな光輪の中に、合体された五人の大聖者の方々が、左にイエス様、右にお釈迦様、上に金星の長老……。（五聖者合体の時の昌美先生の霊視）〔斉藤長老〕（１９６２年４月号７９ページ）

「この地球が始まる時には、すでに今日救世の大光明として、地球世界を救うことになっていた神々が、大救世主を中心にして、予定の行動として結集して来ているのであると。この救世の力は、今日の歴史始まって以来の大きな力となるのである。」（１９６３年8月号8ページ）

「五井先生によって宣言されたこの“救世主霊団”とは、以下の3つの大霊団により構成される。

１．キリスト・釈尊・マホメット・役の行者・聖徳太子・法然・親鸞・道元・伝教その他地上体験を有する諸聖霊が一体となって、世界人類救済のために一宗一派の小さな枠を超越して結集し、救世の大光明の中心となって働いている。　……　主宰霊団

２．その大霊団の守護援助に当たっている諸神諸仏宇宙人等が一体となって働いている。　……　守護霊団

３．鉱物・植物・動物を支配している高級神霊よる・・協力霊団

〔斉藤長老〕」（１９６４年1月号４５ページ）

「１９７０年7月１１日アメリカ・ニューハンプシャー州ハノーバーにある会員の高木俊介氏の家で、アシュア夫人のお母さんに会う。この人はニューヨークに住む８３才になるロシア人で、アグニ・ヨーガの研究者であり、この人についてモリヤ大師が五井先生に会いに来られたそうである。〔高橋長老〕」（１９７０年１０月号５７ページ）

「ヨガでは救世主をマイトレーヤーといい、つまり弥勒菩薩のことであるが、その周りに7大聖といって、7人の聖者が取りまいているのである。ヒマラヤの山の中に数千年ぐらい生きている聖者である。数千年といっても霊的に生きているわけであるが、肉体的にも時々各地に現われたりするわけである。」（１９７０年12月号２０ページ）

「１９７０年１０月２４日、聖ヶ丘の妛修庵でイギリス人のバズビー氏と会い、クートフミー大師と交流される。

五井先生との祈りの中でトランス状態になったバズビー氏からクートフミー大師のメッセージが次のように語られた。

私たちがこのたびこの愛する使徒両人（バスビー博士夫妻）を日本に導いたのは、（世界宗教者会議の）京都の会議に重きをおいたからではではなく、この聖なる地（聖ヶ丘）に立たせることに大きな意義を感じたからである。

今日、地球世界は重大なる危機に直面しており、大師たちのハイラキーの写しである、人類の霊的ハイラキーを地上に再現するため、あなた方に光、愛、力、祝福を送り、私たちとの霊的きずなを強めたいと思う。

私たちは人の子の器を通して交流し、その結合をいつも強めている。

この器（バズビー博士）はイギリス及びヨーロッパのハイラキーの代表として任命されている。

天と地を結ぶ橋をかける計画は、何千年もあらゆる面から進めてきたが、私たちは（新しい局面の）今日を迎えることを待っていた。

今この計画は多くの先達が予知し、シャンバラにおいてもキーポイントになっている。

この計画は人間の使徒によって、受け継がれ、発展されなければならない。

このことによって地球世界は救われることができ、また救わねばならないのである。

そしてそれが今この聖なる地、われら最愛の人、五井先生によって始められる。

ここにおられるあなた方、この聖地を訪れる人々、特に偉大で輝かしき五井先生に神の光と力と救いと平和の祝福があらんこと。」（１９７０年１２月号２３ページ）

「私が救世の大光明といっているが、マイトレア又の名弥勒仏が中心になっている地球救済の団体である。（１９７１年１月号８ページ）

「ハイラーキー（救世の大光明）の７大聖といって、中心になる７人の偉大なる聖者がいるのであるが、その内の一人がモリヤ大師、それからクートフミー大師、このお二人が中心になって、地球界に働きかけているのである。」（１９７１年１月号９ページ）

「台風でも地震でも防げるのである。神様が助けてくれるのである。この光明霊団の中には、竜神さんが沢山いる。竜神さんは台風を担当しているから、ちょっと頼むと変えてくれる。」（１９７７年４月号２１ページ）

五井先生のみ教えは，どのようにして生まれたのか、またその特長知り、また祈りによる世界平和運動のあり方を知ることにより、日々の生活の有効な過ごし方を会得できたように感じます。

特に、み教えを実践する上で、高い深い神の理念をその底に持ちながら、表面の姿としては最も安易に現世利益に妥協し、すべての想念行為、業想念行為をも消えてゆく姿という教えの中で、赦しきっている点は、とても平易であり、ありがたく感じるところです。

また私たちが世界平和の祈りを唱えたとき、どのような神々が光を送ってくれているかを具体的にはっきり知ることにより、救世の大光明の偉大さを実感することへの道が開かれていることに気づきます。そして祈ることのありがたさをあらためて感じる次第です。